

ふたたびマルクス機械論草稿の 執筆時期について（上）

——機械論草稿連続執筆説の批判——

松 尾 純

I. はじめに——旧稿¹⁾までの論争の概観

マルクスの1861-63年草稿が *Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe*（以下 *MEGA* と略記する）第2部第3巻第1分冊～第6分冊²⁾として公刊されて以来、『資本論』成立史研究が大いに進展しつつある。とりわけ研究の出発点ともいえる草稿の執筆順序・時期について、これまで無批判的に受け入れられてきた *MEGA* 編集部の見解にたいして疑問が呈ぜられ、現在幾つかの重要部分に関して論争が展開しつつある。

論争の焦点は、現在のところ2つである。一つは、草稿「第3章 資本と利潤」（ノートⅥ・973—1021）および「雑録」部分（ノートⅦ・1022—1028）が草稿「5. 剰余価値に関する諸学説」その他（ノートⅥ—ⅩVおよびノートⅦ・1029—ノートⅧ）に先行して執筆されたのか、それとも、それよ

1) 拙稿①「マルクス機械論草稿の執筆時期をめぐって——執筆中断説と連続執筆説の対立——」桃山学院大学『経済経営論集』第27巻第2号，1985年10月。

2) Karl Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861-63)*, in: *Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe*, Abt. II, Bd. 3, Teil 1, 1976; Teil 2, 1977; Teil 3 1978; Teil 4, 1979; Teil 5, 1980; Teil 6, 1982, Dietz Verlag. 以下この書を *MEGA* と略記する。引用に際しての訳文は，Teil 1～5 部分については，資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス資本論草稿集』（以下草稿集と略記する）④⑤⑥⑦⑧，大月書店，1978，1980，1981，1982，1984年に従う。幾つかの個所で訳文を変更したが，いちいち断らない。以下この書からの引用に際しては，引用文直後に *MEGA* の引用ページと草稿集のページを次のように略記して示す。例（*MEGA*, 1974；草稿集④234）。

りもあとに執筆されたのか、という問題である³⁾。筆者は、すでに、この問題をめぐる論争を概観し、草稿「第3章 資本と利潤」・「雑録」が「諸学説」その他に先行して執筆されたということを簡単ながら論証しておいた⁴⁾。その後の研究状況から判断して、「諸学説」の先行執筆説が退けられたものと断定することができる。筆者は、その後草稿「第3章 資本と利潤」・「雑

- 3) この議論に関係する論文として次のものがある。大村泉①「一般的利潤率・生産価格と剰余価値の利潤への転化」『北海学園大学経済論集』第30巻3号, 1982年12月。大村②「生産価格と『資本論』第3部の基本論理(上)(中)(完)」『経済』227, 228, 229号, 1983年3, 4, 5月。服部文男「マルクス・エンゲルス研究の最近の動向と課題」『経済』237号, 1984年1月。大村③「論文集『『資本論』第二草稿』(Der zweite Entwurf des »Kapitals«) (ベルリン, 1983年)の刊行によせて(上)」『経済』240号, 1984年4月。吉田文和「ふたたび『機械論草稿』について」『経済』241号, 1984年5月所収の「〈付記〉原伸子氏の批判に接して」の「二」の大村稿④「草稿『第3章 資本と利潤』=1862年12月作成説にたいして」。佐武弘章①「『剰余価値学説史』執筆の動機とその『資本論』成立史への影響について」『社会問題研究』第32巻1号, 1983年10月。W. Focke, Zur Geschichte des Textes, seiner Anordnung und Datierung in: *Der zweite Entwurf des »Kapitals«*, Dietz Verlag, Berlin, 1983。原伸子「『資本論』草稿としての「1861—63年草稿」について(1)」『経済志林』第51巻第4号, 1984年3月。Omura, I. ⑤, Über die Entstehungsphasen des “Dritten Capitel. Capital und Profit” und der “Miscellanea”: Dezember 1862 oder Dezember 1861?, *Beiträge Zur Marx-Engels-Forschung*. Bd. 16, 1984。大村⑥「新『メガ』編集者による編集訂正と『資本論』成立史の新たな時期区分」『経済』259号, 1985年11月。大村泉・大野節夫「DDRでの二つのコロキウムに参加して」『経済』261号, 1986年1月。Manfred Müller/Wolfgang Focke, Wann entstand das “3. Capitel: Capital und Profit”, das in Marx’Manuskript “Zur Kritik der politischen Ökonomie” von 1861 bis 1863 enthalten ist?, *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*, Bd. 16, 1984。大村⑦「資本一般と競争——草稿第3章『資本と利潤』を中心に——」経済理論学会編『「資本論」の現代的意義』, 年報第21集, 青木書店, 1984年。秋田清「ロートベルトゥスの地代論とマルクス——『剰余価値学説史』におけるマルクスとリカード(Ⅰ)(Ⅱ)——」九州大学『経済学研究』第47巻第4号, 1982年6月, 1985年12月。鳥居伸好①「一般的利潤率の形成と生産価格——『1861—63年草稿』の検討を中心として——」『愛知論叢』35・36合併号, 1984年3月。鳥居②「マルクスの『1861—63年草稿』におけるリカードの地代論批判」『愛知論叢』40号, 1986年3月。鳥居③「マルクス生産価格論の形成」経済学史学会第50回全国大会(早稲田大学), 1986年11月8日, レジュメ。大村⑧「絶対地代の発見と『資本一般』——『剰余価値学説史』『g. ロートベルトゥス氏』と草稿第3章『資本と利潤』との連繫——」『経済学』(東北大学)第48巻3号, 1986年11月。
- 4) 拙稿②「1861—63年草稿記載の『第3章 資本と利潤』の作成時期について」桃山学院大学『経済経営論集』第26巻第1号, 1984年6月。

録」執筆先行説に立脚して1861-63年草稿における「利潤率低下法則論の形成過程」⁵⁾ および「生産価格論の形成」⁶⁾ 過程を解明することによって、考証された執筆順序が正しいものであることを再確認した。

論争のもう一つの焦点は、ノートV・190-219およびノートXIX・1159-1282記載の「γ. 機械。自然諸力と科学との応用（蒸気、電気、機械的諸作用因と科学的諸作用因）」（以下機械論草稿と略記する）が、いつ、どのようにして、執筆されたのか、という問題である⁷⁾ 論争は機械論草稿執筆中断説と機

- 5) 拙稿③「利潤率低下法則論の形成過程」(1)(2)(3)桃山学院大学『経済経営論集』第25巻第4号、第26巻第3号、第4号、1984年3月、12月、1985年3月。
- 6) 拙稿④「生産価格論の形成」(1)(2)(3)(4)、桃山学院大学『経済経営論集』第28巻第1号、第2号、第3号、第4号、1986年6月、10月、12月、1987年4月。
- 7) この議論に関する論文として次のものがある。Jürgen Jungnickel, Zu Inhalt und Bedeutung des Abschnitts "Maschinerie. Anwendung von Naturkräften und Wissenschaft" im Manuskript von 1861-1863. in: ... *unser Partei einen Sieg erringen. Studien Zur Entstehungs- und Wirkungsgeschichte des "Kapitals" von Karl Marx*, Verlag Die Wirtschaft Berlin, 1987. Ders., Die systematische Ausarbeitung der Theorie des relativen Mehrwerts, in: *Der Zweite Entwurf des »Kapitals«*, Dietz Verlag, Berlin, 1983. Ders., Einige Bemerkungen zur Marxschen Analyse des Unterschieds von Werkzeug und Maschine. *Beiträge Zur Marx-Engels-Forschung*. Bd. 5, 1979. Manfred Müller, Zur Charakteristik der letzten Arbeitsphase am Manuskript "Zur Kritik der politischen Ökonomie (1861-63)" von Karl Marx, *Beiträge Zur Marx-Engels-Forschung*, Bd.5, 1979. 吉田文和①前掲論文。吉田②「J. H. M. ポッペ『テヒノロジーの歴史』とマルクス」『経済学研究』第33巻第1号、1983年6月。吉田③「『剰余価値学説史』と「機械論草稿」」『経済』234号、1983年10月。Yoshida, F. ④, Wurden Marx' "Theorien über den Mehrwert" nach der Unterbrechung seiner Arbeit andem "Maschinerie-Manuskript" Geschrieben?, *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*, Bd. 16, 1984. 吉田⑤「マルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』を調査して」『経済学研究』第35巻第2号、1985年9月。吉田⑥「新MEGA編集者をたずねて」『経済』, 1985年10月号。吉田⑦「マルクスの『機械論草稿』の執筆時期について——内田弘氏の拙稿批判への回答——」『経済学研究』第35巻第3号、1986年1月。大村泉・吉田文和「『剰余価値学説史』執筆前後の理論的諸問題——『機械論草稿』作成過程の論争をふまえて——」『北海道大学経済論集』第33巻第4号、1986年3月（以下、大村・吉田共同論文と略記する）。吉田⑧『マルクス機械論の形成』北海道大学図書刊行会、1987年。内田弘①「『資本論』成立史における『直接的生産過程の諸結果』」『専修経済学論集』第10巻第2号、1976年2月。内田②「機械論から剰余価値学説史へ——『1861—63年草稿』機械論草稿「連続執筆」説批判——」『専修大学社会科学研究所月報』249号、1984年4月20日。内田③『中期マルクスの経済学批判』有斐閣、1985年。内田④「『二重の不変資本問題』の理

械論草稿連続執筆説に分かれて展開している。前者は、機械論草稿はノート V・190から始まりノート V・211の途中まで執筆され、そこで中断し、次にノート VI—XVおよびノート XVII・1029—ノート XVIIIにおいて「諸学説」その他が執筆され、そのあと再びノート V・211にもどって機械論草稿の執筆が再開され、ノート V・211—219とノート XX・1159—1282に機械論草稿の後半部分が執筆されたとする見解である。これは、MEGA 編集部および原伸子、佐武弘章、内田弘氏らの見解である。これに対して、後者は、機械論草稿は、「諸学説」その他（ノート VI—XV、ノート XVII・1029—XVIII）が執筆されたのち、ノート V・190—219、ノート XX・1159—1282において連続して執筆されたのであり、ノート Vの執筆中断は190ページの直前あるいは176ページにおいて生じたとする見解である。これは、吉田文和・大村泉両氏および大野節夫氏らの見解である。この論争は、現在もなお決着を見ず継続中であるのみならず、連続執筆説内部においてノート Vの中断箇所をめぐる⁸⁾、また、執筆中断説内部において執筆中断の理由をめぐる⁹⁾ 論争が展開されている。

本稿では、この機械論草稿の執筆時期をめぐる論争を取り上げる。まず、論点を整理し残された問題点を摘出し、次に、それらの論点のいくつかを検討し、筆者自身の論拠をいくつか提示することによって執筆中断説の正当性を主張することにする。

論射程 『1861～63年草稿』における『機械論草稿』はどのような順序で書かれたか』『専修経済学論集』第21巻第1号、1986年9月。内田⑤『「二重の不変資本問題」の意義——佐武弘章氏の批判に答える』『経済評論』1987年12月号。佐武弘章②「マルクス機械論に影響を与えた一匿名書について」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』第32巻、1984年。佐武③「マルクス機械論の形成——1. 形成過程における動揺——」『社会問題研究』第33巻第2号、1984年1月。佐武④「マルクス機械論の形成——2. 執筆の中断——」『社会問題研究』第34巻第1号、1984年9月。佐武⑤「マルクス機械論執筆中断の理由について——内田弘『二重の不変資本問題』説の批判——」『経済評論』1987年10月号。佐武⑥『「資本の生産過程論」の成立』未来社、1987年。大野節夫①『「1861—63年草稿」と経済学批判体系プラン』（上）（下）『経済』243号、244号、1984年7月、8月。大野②『「経済学批判」から『資本論』へ』（上）（下）『経済』256号、257号、1985年8月、9月。

8) 大野論文①②と大村・吉田共同論文を見よ。

9) 内田論文⑤と佐武論文⑤を見よ。

最近の論争内容に入る前に、それ以前の論争内容を筆者旧稿における整理に立ち戻ってごく簡単に概観しておこう。

論点整理の都合上、執筆中断説を *MEGA* 編集部の見解に代表させて見ておこう。*MEGA* 編集部の推定の根拠は次の5点につぎる¹⁰⁾。

①ノート V・211でマルクスは1862年11月26日付けの『ザ・タイムズ』紙掲載の一論文から長大な抜粋を行なっている。したがって、この引用箇所以降が書かれたのは少なくとも1862年11月26日よりあと——したがっておそらく「5 剰余価値に関する諸学説」よりもあと——である。

②1863年1月24日付、1月28日付のエンゲルスあての手紙で、マルクスは機械に関する篇の仕事をしていることを知らせている。とくに、彼は、1月28日付の手紙で、「僕は機械に関する篇に2, 3のことを書き加えている。そこには、最初の取り扱いのときには僕が無視していたいくつかの興味深い問題がある」と述べているが、文中の「最初の取り扱い」とは、機械論草稿のいわゆる前半部分の仕事のことであり、また、「興味深い問題」とは、ノート Vの執筆中断以降の技術学的問題のことであろう。

③1862年3月6日付の手紙のなかで、マルクスは「マニュファクチュアの基礎ををなしたA・スミスによって描かれているような分業は、機械制作業場には存在しない、ということ——この命題そのものはすでにユアによって詳述されている——を示すための」実例がほしいとエンゲルスに頼んでいるが、マルクスはここでは、ノート V・191にある表現に依っている。つまり、このころマルクスが機械論草稿を執筆していたことをこの手紙は示している。

④ノート V・209に『ベンガル・フルカル』と『ボンベイ商業会議所報告』からの引用があるが、それは、ノート第7冊抜粋部分の208ページから採られたものである。ところが、このノート第7冊抜粋部分の193—208ページは1862年2月25日以降のものである。というのは、193ページに1862年2月25日付の『スタンダード』からの引用があるからである。したがって、ノ

10) 詳しくは拙稿①, 54-59ページを見よ。

ト V・209の引用は、1862年2月25日以降のものである。

⑤ノート V・211の1862年11月26日付『ザ・タイムス』からの引用直前の個所で、マルクスは、もっと詳しくプルドンに立ち入るという意図を表明しているが、彼はその意図を実現していない。したがっておそらく、『ザ・タイムス』の引用とプルドンの個所との間に執筆の中断が生じ、そして、その中断期間に「5 剰余価値に関する諸学説」が書かれたのであろう。

これに対して、大村・吉田両氏は、機械論草稿連続執筆説を主張し、その根拠として次の3つを提示した。

第1根拠は、機械論草稿冒頭ノート V・192におけるポッペ『テヒノロジーの歴史』の利用である。ノート V・192の「{ }」内の記述は、あとから書きくわえられたのではなく、……ポッペ『テヒノロジーの歴史』第1巻163ページ……の記述をもとにしている。……マルクスは1851年の『テヒノロジー史抜粋ノート』13ページにこの部分を抜粋している。そして、この抜粋を読みかえたのは、1863年1月28日付の手紙……内容からみて、手紙が書かれた直前と推察される。……マルクスが1851年に抜粋した内容を、数字をふくめてそのまま暗記していたという、およそありえないことを想定しないかぎり、ノート Vの『機械論草稿』冒頭は、1863年1月28日前後に書かれたということになる。……そうならば、……『剰余価値学説史』完了後に『機械論草稿』にとりかかったことは明白である」¹¹⁾。

第2根拠は、ノート V・198—210において提起されている「機械導入の動機と諸結果」にかんする8項目の論点に関して、ノート Vとノート XIX, XXの間に認められる「内容的連続性」である。吉田氏は、その後「『機械論草稿』の内容上の連続性については根拠」としない¹²⁾、とされている。したがって、本稿での検討対象からこれは外すことにする。

第3根拠。「1862年3月6日の手紙……内容は、『1861—63年草稿』『b, 分業』ノート IV - 166ページ, ノート V - 175ページに対応している……。…

11) 吉田論文③, 181-182ページ。

12) 吉田論文⑦, 131ページ。

…上記手紙は、ユアとともにA・スミスに言及している点に注目されたい。
……ノートⅣ-166ページ、ノートⅤ-175ページには、ユアとともにA・スミスに言及した記述がみられるのである。……／……ノートⅤ-191ページでは、スミスへの言及はなく、ユアの記述……が引用されているのみである」¹³⁾。

以上が、両説の推定根拠である。前稿での検討結果をふまえて、それぞれの根拠について検討してみよう。

まず *MEGA* 編集部の根拠①について。これは、ノートⅤ・211以下の機械論草稿の後半部分が1862年11月26日以降に執筆されたことを示すだけで、ノートⅤ・190-210の機械論草稿の前半部分の執筆時期についてはなにも語っていない。

次に、*MEGA* 編集部の根拠②について。前稿で述べたように、手紙に見られる『興味深い問題』とは大雑把にいて技術学的分析に関わる問題であるという点で各論者の理解は一致している」が、『最初の取扱い』については、さまざまな解釈が可能なのである。機械論草稿の前半部分のことであるという解釈、『要綱』での機械論のことであるという解釈、さらには『諸学説』執筆後『「機械論草稿」を書き始めるにあたり、当初構想していたもの』……であるという解釈がなされている。吉田氏自身でさえ、『最初の取り扱い』とは、……「経済学批判要綱」における機械の取り扱い』のことであるという解釈から、『1863年1月になって、「機械論草稿」を書き始めるにあたり、当初構想していたもの……』であるという解釈へと動揺しているぐらいである」¹⁴⁾。文言それ自体をいくら検討してみたところで、そこから出てくる一つの可能な解釈をもって、執筆中断説や連続執筆説の「決定的な論拠」とするわけにはけっしていかない。吉田氏は、『最初の取り扱い』という文言そのものは、マルクスが1862年3月に『機械論草稿』を執筆していたことを何ら直接に証明するものではない」¹⁵⁾と言われるが、逆に吉田氏の文言解釈以外にはありえないということも、「証明」することが

13) 吉田論文①, 267-268ページ。

14) 拙稿①, 80-81ページ。

15) 大村・吉田共同論文, 40ページ。

できている訳でもないのである。

次に *MEGA* 編集部の根拠③を見ることにしよう。*MEGA* 編集部は、「マニュファクチュアの基礎をなしたA・スミスによって描かれているような分業は、機械制作業場には存在しない」というユアの命題について触れた手紙の内容とノートV・191の内容とが対応すると解釈する。しかし、ユアの命題そのものはノートV・175でも言及されている訳であるから、ノートV・191はノートV・175および手紙の執筆時期と推定される1862年3月6日より（ずっと）あとに執筆されたという可能性を排除しえないであろう。他方、吉田氏は、1862年3月6日の手紙ではユアとA・スミスにともに言及しており、ノートIV・166、ノートV・175でもA・スミスとユアをともに叙述しているということから、手紙とノートIV・166、ノートV・175との対応関係を——ノートV・191との対応関係を排除して——主張している。しかし、たんに兩個所でユアとスミスの両方に言及しているという程度の事実関係から、どうして、手紙と草稿との執筆時期の対応関係を「考証」したといえるのか、筆者には理解しかねる。*MEGA* 編集部にしる吉田氏にしる「考証上の面に限定して」¹⁶⁾ 手紙と草稿との対応関係を確定することは、いまのところできていないと言わざるをえない。両者の「対応」関係は、内容的な対応関係がそこになんらかの形で確認されたとしても、「考証」上の「決定的な論拠」となしうるほどのものではなく、単なる状況証拠にすぎない。両者の対応関係だけから、両者の執筆時期の一致を導きだせるものかどうか、「考証」方法として疑問と言わざるをえない。

次に、*MEGA* 編集部の根拠④について。これは、吉田氏の批判をまつまでもなく、執筆中断説の根拠にはなりえない。根拠④によって確定しうるのは、ノートV・209の執筆時期の「上限」=1862年2月25日だけである。これ以降であれば、ノートV・209の執筆は何時であってもいい訳である。

最後に、*MEGA* 編集部の根拠⑤について言うと、いまのところ吉田氏と同様に、「このプルドンの問題は草稿執筆時期の確定的な証拠たりえない。

16) 吉田論文①, 266ページ。

なぜなら、それを直接に証明するものはなにも示していないからである」¹⁷⁾と言わなければならない。*MEGA* 編集部の解釈も、また、——「『機械論草稿』になって、……『……プルドンのたわごとについては別のところ』とはじめに書いたのである。この記述は、プルドンについてはすでに『剰余価値学説史』で言及したとみることができる。……『われわれはこの場所で、すぐに、プルドンの全汚物をまとめておくことにしよう』というのは、すでに『剰余価値学説史』において、プルドンの学説を……検討していることを前提にした記述である」¹⁸⁾ という——吉田氏の解釈も、与えられた同じ事実からは、共に十分に成り立ちうる推定である。しかし、吉田氏にしろ *MEGA* 編集部にしる、互に相手の推定が成り立ちえないということを「証明」・「考証」しえた訳ではないのである。

因に、この問題についての筆者の考えはこうである。すなわち、プルドンの { } 部分には「不変資本の価値について言えば、この価値は、それ自身によって、現物で補填されるかまたは不変資本の他の諸形態との交換によって補填されるかするのである」(*MEGA*, 318; ④557) という叙述が存在する。ここでマルクスは不変資本の現物補填、不変資本と不変資本の交換による補填について説明しているが、これらの論点は、再生産論の形成に関する諸研究において一般に指摘されているように、「諸学説」の「年々の利潤と賃金とが、利潤と賃金とのほかに不変資本をも含む年々の商品を買うということは、どうして可能か、の研究」(ノートⅥ・272—ノートⅦ・299: *MEGA*, 398-438; ⑤109-169) においてはじめて本格的に掘みだされ、それを起点とする一連の再生産論研究¹⁹⁾をつうじて深められていく論点である。これらの論点が、ノートⅤ・210—211で了解ずみの論点であるかのように要約的に指摘されている以上、少なくともノートⅤ・210-211部分(*MEGA*, 317-318; 草稿集④555-557)については、「諸学説」執筆以後に書かれたものと理解するのが自然であろうと思われる。したがって、このプルドンに

17) 吉田論文⑦, 134ページ。

18) 吉田論文③, 187-188ページ。

19) とりあえず、水谷謙治『再生産論』、有斐閣、1985年、第5章を参照せよ。

関する { } 部分の冒頭と末尾の文言——「Von Proudhon's Blödsinn we speak another place.」, 「Wir wollen an dieser Stelle gleich den ganzen Breck von Proudhon zusammenstellen.」——も次のように解釈すべきであると考え。すなわち, 「諸学説」各所でプルードンに対する幾つかの批判的言及を加えてきたマルクスは, まず「Von Proudhon's Blödsinn another place プルードンについては別のところ」と書く。その意味は, 「プルードンについては別のところで (すでに述べた)」ということであろう。あとで書き加えられた「We speak」は, 文法的には, 現在進行中の動作ではなくて「we will speak」か「we have spoken」であるが, 後者として理解すべきであろう。他方, 末尾の「われわれはこの場所で, すぐに, プルードンの全汚物をまとめておくことにしよう」と述べているが, その意味は, すでに「諸学説」のいろいろな場所でプルードンの学説について批判的に言及してきたことをいまここで「まとめておくことにしよう wollen……zusammenstellen」ということである。しかし, このマルクスの意図は, この場所が機械論草稿の途中であるがゆえに, 実現されずに終わった。かくて { } 部分の冒頭と末尾の文言は, 次のような文脈になる。すなわち, ≪プルードンについては別のところ (「5 剰余価値に関する諸学説」の各所で) すでに述べた≫が, ≪われわれはこの場所で, すぐに, すでに批判的に言及したプルードンの全汚物をまとめておくことにしよう≫, と。

しかし, 「いずれにしても, このプルードンの問題は〔機械論〕草稿執筆時期の確定的な証拠たりえない」²⁰⁾ と言わざるをえない。

かくて, 執筆中断説を主張する *MEGA* 編集部の5つの根拠はどれ一つとして確固とした根拠ではありえないと言うことができよう。

他方, 連続執筆説の3つの根拠についてはどうか。

まず, 吉田氏の第1根拠について。吉田氏は, 1863年1月28日付の手紙の直前に, 『テヒノロジー史抜粋ノート』を読みかえした, そして, ノートVの機械論草稿冒頭におけるポッペへの言及は1863年1月28日前後に書かれた,

20) 吉田論文⑦, 134ページ。

という推定をもって自説の「決定的な論拠」²¹⁾ であるとしているが、しかし、1851年の『テヒノロジー史抜粋ノート』の内容をマルクスが覚えていたという第2の推定は、いまのところ、なにびともけっして否定しえないであろうし、また、1862年3月ごろ、あるいは、それ以前に、マルクスが1851年の『テヒノロジー史抜粋ノート』を読みかえしたのではないかという第3の推定も、けっして否定しえないのである。これらの可能性を否定しうる証拠・資料をわれわれはいまのところ知らない。

その後、諸氏の批判を受けて、吉田氏は第1根拠を次のように「補強」される。すなわち、『テヒノロジー史抜粋ノート』13ページ48～49行目、1861—63年草稿ノートV・192、ノートXX・1166. 以上「3つの部分を比較して気づくのは、ノートV-192ページの記述が、『抜粋ノート』13ページの要約的記述であり、XX-1166ページの記述は、『抜粋ノート』13ページのそのままに近いが、……一部が異なっており、……『ポッペの文を直接、原文のまま』……使用しているわけではない点である。したがって、『不正確』という点では……五十歩百歩であって、ノートV-192ページの記述の『不正確』さをもって、そのみが記憶にもとづくものであると断定することはできないであろう。／……ノートXX-1166ページのみならずその前のノートXX-1162ページ以降における記述も、『抜粋ノート』の同じ見開きの、12-13ページにもとづいている……。ノートV-192ページとノートXX-1162ページ以降の記述の基礎となっている『抜粋ノート』のページが同じ見開き部分にある……。このことは、ノートV-190ページからはじまる『機械論草稿』冒頭部分が、『中断』なく、それ以降の部分に書きつづけられたことを示す1つの傍証となるであろう」²²⁾。要約するところなる。ノートV・192の記述は『抜粋ノート』の13ページの要約的記述であり、ノートXX・1166の記述は、『抜粋ノート』13ページのそのままに近い。「不正確」という点では五十歩百歩である。前者の「不正確」さを記憶にもとづくものであると断定することはで

21) 吉田論文③, 181ページ。

22) 吉田論文⑦, 128ページ。

きない。ノートV・192とノートⅨ・1162以降の記述の基礎になっている『抜粋ノート』のページが同じ見開き部分にある。「このことは、……『機械論草稿』冒頭部分が、『中断』なく、それ以降の部分に書きつづけられたことを示す1つの傍証となるであろう」と。

「要約的記述」と「そのままに近い」記述とを、然したる理由もなく「五十歩百歩」である断定してしまい、そこから、ノートV・192の「要約的」記述の「不正確」さは、記憶にもとづくものではないと言われても、ただちに首肯しがたいのである。ましてや、ノートV・192とノートⅨ・1162以降の記述が、『抜粋ノート』のページが同じ見開き部分によっているということから、これらの部分は「中断」なく書きつづけられたものであると「推定」しているが、これは乱暴極まりない「推定」であると言わざるをえない。しかもさらに、これらの「推定」を、機械論草稿連続執筆説の「決定的な論拠」から秘に後退させて1つの「傍証」であるとされているに至っては、何をか言わんやである。「1863年1月以前に、マルクスが『テヒノロジー史抜粋ノート』を『読み返した』という『第1の可能性』も、1851年に抜粋したノートの内容をそのまま1862年になっても記憶していたという『第2の可能性』も立証できないのである」²³⁾と言われるが、自説の「立証」もできず解釈の多様性を残したまま「傍証」に終わっているにもかかわらず、批判者にも「立証」責任を負わせるのは、如何なるものであろうか。

次に、吉田氏の第2根拠について。すでに述べた事情から、本稿での検討対象からこれを外すことにする。吉田氏の本意は、確かな根拠に基く考証を補強するための状況証拠としてこの第2根拠を考えるとということであろう。

最後に、吉田氏の第3根拠について。すでに述べたように、1862年3月6日付の手紙をいくら微細に検討してみても、それは「決定的な論拠」を与えてはくれない。

以上が、最近にいたるまでの論争の概要である²⁴⁾。結論的に言うと、ME-

23) 同上，128-129ページ。

24) その後、吉田氏は次の2つの論拠を追加された。すなわち、第4根拠＝「Heft XVIIの冒頭，1022-28ページ記載の『雑録』は1862年1月－3月に作成され，こ

GA 編集部も、吉田・大村両氏も、自説を証明するための「決定的な根拠」を提示できていないということである。

Ⅱ．大野節夫氏の機械論草稿連続執筆説——論争の新たな展開

機械論草稿の執筆時期をめぐる論争は、大野氏による新たな根拠の提示によって新たな展開をみせるようになった。以下、大野説を検討してみよう。

大野氏は、ノート V・176 において執筆が中断されたとする。すなわち、「ノート V の執筆にはいて、その最初の175ページと176ページに2行を書いただけで、マルクスは『3 相対的剰余価値』の執筆を中断し、『5 諸

の擱筆の時期は『3月1日』以前ではありえない。だがここでは、マルクスは、特別剰余価値の問題を商品の『社会的価値』、『個別的価値』といった概念を用いることなく考察しているばかりか、『個別的価値』というべきところを誤って『社会的価値』とさえ述べている。しかし『機械論草稿』の冒頭で特別剰余価値の問題を考察する際には、右の二つの概念を駆使して行なっている」（大村・吉田共同論文、40ページ）。第5根拠＝「MEGA 第Ⅱ部第3巻に収載されたファクシミリなどによれば、Heft V, 190ページ以降と189ページ以前とでは行数、筆勢とも異なる」（同上）。「ノート V-190ページよりあとでは、それ以前とくらべて①行間がせまく……、②筆跡が細く書かれている……。③行が水平に書かれている。／……ノート V-182ページ（『分業』）とノート VI-220ページ（『剰余価値学説史』）のフォトコピーを比較することができる……。そこには筆跡の近似性がみられる」（吉田論文⑥、227ページ）。

まず、第4根拠について。「雑録」は1862年1月—3月に作成された；擱筆の時期は「3月1日」以後である；「雑録」においてマルクスは「特別剰余価値の問題を……『社会的価値』、『個別的価値』といった概念を何ら用いることなく考察している」ということは、たしかに吉田氏の言われるとおりであるが、しかし、「雑録」中の特別剰余価値の問題を考察している個所はノート X VII・1023—1024であり、そこでは「社会的価値」「個別的価値」という概念が使用されていないからといって、そのことと機械論草稿冒頭において特別剰余価値の問題が2つの概念を駆使して考察されているということが矛盾しているとは直ちに言えないのではなからうか。「雑録」ノート X VII・1023—24の執筆時期と「雑録」の擱筆時期とがそれほど接近していないとすれば、そして、機械論草稿が「雑録」の擱筆以後に、あるいは少なくともノート X VII・1023—24以後に着手されたとすれば、うえのような事実経過を矛盾なく理解することができるのではなからうか。

次に、第5根拠について。吉田氏の指摘されることがすべてそのとおりであるとしても、それはノート V・189とノート V・190との間になんらかの時間的隔たりがあった可能性を意味するだけであって、両者の間に9カ月の隔たりがあるということまで意味する訳ではないのである。要するに、状況証拠にすぎないのである。

学説』の執筆に転換する。『5 諸学説』以後ふたたび分業項の補足が書きこまれていく。ユアの命題にかんする記述とG・ガルニエの分業論にかんする記述以後をしきる一本の線がノートVの中断個所をしめすものである²⁵⁾。

大野氏の推定根拠は何か。

第1根拠。ノートV・176—189, ノートV・190—211, ノートII・89—93, ノートIII・124a—124h が「ほぼ同一の時期に執筆されたことは、これらの諸部分に引用・利用されたいくつかの共通な文献の存在からもうらづけられる²⁶⁾」。「ノートIII, 124f～g ページとノート・XVIII, 1142～1144ページとは、……あいついで書かれたものであろう。……執筆時期は、ノート・XVIIIのこの部分が執筆された1862年の12月以外ではありえない²⁷⁾」。「ノート・XVIII, 1139, 1140ページの……プランの記述のあとに、いったんその執筆が中断された。そして、この中断期に、ノート・III, 124a～h ページの補遺およびノート・XVIII, 1140～1144ページの補遺群が書かれた。さらに、[前者——松尾]……が1862年12月に書かれたことは、……[ノートV・176—189, ノートV・190—211, ノートII・89—93——松尾]もまた、同一の時期、すなわち『5 諸学説』以後、1862年12月以後に執筆されたことをしめしている²⁸⁾」。

第2根拠。「ノート・V, 175ページに引用されている……ユアの文章は、[1862年3月6日付の——松尾]手紙でいうユアの命題『マニユファクチュアの基礎をなし、A・スミスによってえがかれているような分業が機械制工場には存在しない』と完全に一致している²⁹⁾」。「手紙の文面に対応する草稿の記述個所が、……ただノート・V, 175～176ページのみであることは明白である。マルクスは1862年3月6日ごろ、ノート・V, 175～176ページを執筆していたのである³⁰⁾」。

第3根拠。ノートV・178の記述＝「人口中の奴婢部分も同様である。たと

25) 大野論文②(上), 222ページ。

26) 同上, 215ページ。

27) 同上, 218-219ページ。

28) 同上, 219ページ。

29) 同上, 221ページ。

30) 同上, 222ページ。

えばイングランドでは100万人にのぼるのであって、この数は織物工場と紡績工場とで直接に働いている労働者を全部あわせたよりも多い」(MEGA, 276; ④487)。ノートⅦ・303の記述＝「工場に関する最近のイギリスの官庁報告書もやはり、工場主だけを除き、工場と付属事務所で使われているすべての人を『はっきりと』就業賃労働者の部類に数えあげている。（この結びを書き終える前に、報告書の字句を見ること。）」(MEGA, 443; ⑤177)。ノートⅧ・358の記述＝「工場に関する最近の報告書（1861年または1862年）によれば、連合王国の本来的工場で使用されている（管理人も含めた）総人員数は77万5534人にすぎないのに——『下院の奉答文に関する報告書』、1861年4月24日付。（1862年2月11日印刷）——，他方、婦人の召使の数は、イングランドだけで100万人に達した」(MEGA, 520; ⑤306-307)。これらに対比して次のように言う。「ノート・Ⅷ，358ページの記述は『5 諸学説』での『生産的労働と不生産的労働との区別』の執筆過程での『工場』の再読の結果，獲得されたものとみなしうる。……ノート・Ⅴ，178ページの記述も社会的分業を『生産的労働と不生産的労働との区別』に立脚して論じる一連の記述の一部であるとみてとることはけっして困難ではない。したがって，……Ⅴ・178ページの記述は、『工場』を再読した結果獲得したノート・Ⅷ，358ページの記述を，のちに，分業項の執筆を再開したときに，要約的に記述されたものとなろう」³¹⁾。以上要するに，ノートⅦ・303の記述（末尾における「報告書の字句をみること」という文言）→『工場，1861年4月24日付，下院の要請にたいする報告書（1862年2月11日，下院の命により印刷）』の再読→ノートⅧ・358の記述→ノートⅤ・178での「要約的」記述，という執筆順序が推定される。

第4根拠。ノートⅤ・178の記述——「労働そのものに関連するかぎりでの，科学の労働からの分離，工場や農業をその応用とする科学の工業労働者と農業労働者からの分離については機械の項で，（そうでなければ，これらの考察はすべて，資本と労働にかんする最終章に属する）」(MEGA, 277; ④

31) 同上，223ページ。

489-490) —について大野氏は次のように言われる。「この記述の前段は『5 諸学説』の「0 リチャード・ジョンズ」での展開（ノート・Ⅷ, 1152ページをみよ）とかかわる。……／右の記述が1862年3月ごろ……とすれば, ……1862年3月ごろには, 『Ⅰ 資本の生産過程』の後半部の編成項目がつぎのように変化したとみるほかないことと矛盾する。／3 相対的剰余価値 4 資本の蓄積 5 剰余価値にかんする諸学説／すなわち, 『Ⅰ 資本の生産過程』の編成項目から, 『5 賃労働と資本』が消失しているのである。／これにたいして, 右の記述が1862年12月に書かれたとすれば, われわれは『資本と労働にかんする最終章』がノート・Ⅷ……の『第3篇 資本と利潤』プランの『12 むすび。「資本と賃労働」』に対応すると理解できる」³²⁾。要するに, 文中の「資本と労働にかんする最終章」という文言は, 1862年3月ごろのプランには合致しないで, 1862年12月・ノートⅧのプランにのみ合致すると考える。

第5根拠。ノートⅤ・182—183の「哲学者は思想を, 詩人は詩を, 牧師は説教を, 教授は概説書を生産する, 等々。犯罪者は犯罪を生産する」(MEGA, 280; ④496)という記述は, ノートⅦ・299～ノートⅨ・379の「生産的労働と不生産的労働との区別」論中の「シュトルヒによれば, 医師は健康を……生産し, 教授や著述家は啓蒙を……生産し, 道学者などは道徳を生産し, 説教師は敬神を生産し, 君主の労働は治安を生産する, 等々。」(MEGA, 605; ④443)という記述と「同質的である」³³⁾。「それは, ただ, ノート・Ⅴ, 176ページ以後の分業論が, この『{余論(生産的労働について)}』……にいたるまで, 『生産的労働と不生産的労働との区別』に立脚した社会的分業にかんするもの……であることに対応しているにすぎない」³⁴⁾。要するに, ノートⅦ・299～ノートⅨ・379における「生産的労働と不生産的労働との区別」論→ノートⅤ・176以後の分業論=「生産的労働と不生産的労働との区別」に立脚した社会的分業論, という執筆順序を推定される。

32) 同上, 223ページ。

33) 同上, 224ページ。

34) 同上, 224ページ。

かくて、大野氏は次のように結論づけられる。「(ノート・V, 176～189ページ) が, …… [ノート V・190—211, ノート II・89—93, ノート III・124 a—h——松尾] と同一の時期に書かれたこと, …… (ノート・III, 124f～g ページ) がノート・XVIII, 1142～1144ページと同じ1862年12月に書かれたこと」³⁵⁾, 「ノート・V, 175～183ページの検討において……その176ページで諸記述をしきる一本の線を分水嶺とし, これ以前が『エンゲルスへの手紙, 1862年3月6日付』の文面に対応し, これ以後の記述が『5 諸学説』と並行してか, あるいはよりあとに書かれたこと」³⁶⁾, が明らかになった, と。

以下, これらの5つの根拠について検討してみよう。論点整理の都合上, 第2, 第3, 第4, 第5根拠からみることにしよう。大野氏は, 上記の第3, 第4, 第5の根拠を指摘されたのち, 意外にも, 科学的良心に基づいてか, 次のように言われる。「右に考察した諸点は, ノート・V, 176ページの以前の記述をしきる一本の線以後の記述が『5 諸学説』以後に書かれた状況をうかびあがらせる。第2 [本稿では第4根拠——松尾] に考察したことをのぞけば, この部分は『5 諸学説』よりもまえに書きえたかもしれない」³⁷⁾, と。この大野氏の言葉に従えば, 上記の第3, 第4, 第5根拠のうち第4根拠以外は「状況」証拠にすぎないものであるということになるが, 以下念のために少しく検討しておこう。

まず, 第2根拠について。ノート V・175 のユアの文章が1862年3月6日付の手紙でいわれるユア命題と完全に一致する, したがってノート V・175 の執筆は1862年3月6日ごろであると大野氏が推定されるが, しかし, 大村氏が指摘されるように, 「ユアの命題そのものに限るならば, 大野氏も認められているように, Heft V, 191ページにも見出される」³⁸⁾。すなわち, 手紙の「ぼくの本のために, マニユファクチュアの基礎をなし, A・スミスによって描かれているような分業が機械制工場には存在しない, ことをしめす—

35) 同上, 224ページ。

36) 同上, 225ページ。

37) 同上, 224ページ。

38) 大村・吉田共同論文, 40ページ。

例がほしい。命題そのものはすでにユアによって詳論されている」という叙述は、ノート・191の次の叙述と一致することを否定しえないであろう。

「単純協業は、……機械では、分業にもとづくマニファクチュアでよりも、はるかに重要な契機として現われる。……機械制作業場では、多くの人々が同じことを行なうということは、本質的なことである。これは機械制作業場の主要原理である。……マニファクチュアで展開された分業は、一面では、きわめて縮小された規模ではあるが、機械制作業場のなかで繰り返される。他面では、のちに見るように、機械制作業場は分業にもとづくマニファクチュアの最も本質的な諸原理を捨ててしまう」(MEGA, 293; ④515-516)。ここから直ちに1862年3月6日の手紙の内容がノートV・191の記述にのみ対応すると断定することができる訳ではもちろんないが、しかし、両者の対応関係を否定しうる確実な事情がない以上、大野氏のように、「手紙の文面に対応する草稿の記述個所が、……ただノート・V, 175～176ページのみである」³⁹⁾と断言しうる訳でもない。

ノートV・175と1862年3月6日の手紙の対応関係が排他的に確認しえたとしても、そこから確実に推定しうることは、ノート・175の「ユアの命題にかんする記述までが1862年3月はじめ〔まで〕に執筆された」⁴⁰⁾ということだけであろう。そもそも、たとえノートV・175と1862年3月6日の手紙との間に対応関係が確認されたとしても、それは、両者が同一時期に書かれたということを直ちに意味するとはかぎらないのである。したがって、大野氏のこの第2根拠は、ノートV・176の「一本の線のあとのガルニエの分業論以後が『5 諸学説』よりもあとに、あるいはこれと並行して執筆された」⁴¹⁾という推定の決定的な根拠にはなりえないのである。

次に、第3根拠について。大野氏は、ノートVII・303の「工場に関する最近のイギリスの官庁報告書」に基づく記述の末尾の「報告書の字句を見ること」という文言、ノートVIII・358の報告書の詳細な数字を含む記述、ノートV

39) 大野論文②, 222ページ。

40) 同上, 222ページ。

41) 同上, 222ページ。

・178での「要約的」記述という事実から、ノートⅦ・303→ノートⅧ・358→ノートⅤ・178という執筆順序を推定される。しかし、ノートⅤ・178の「記述における『人口中の奴婢部分は、……イギリスで100万人にのぼる』ことの認識は、たぶん1861年春におこなわれた国勢調査の報告にもとづくものであろう」⁴²⁾し、また、「この記述は、『織物と紡績の工場で直接に働いている労働者全部』の数を前提としているかぎり、『工場、1861年4月24日付、下院の要請にたいする報告書（1862年2月11日、下院の命により印刷）』にもとづく」とみられ⁴³⁾るとすれば、そして、マルクスがこの『工場』を1862年2～3月には読んでいたことは「1862年3月6日付の手紙で、これに由来する『gigs』および『feeders on circular frames』に言及していたことからあきらかである」⁴⁴⁾という大野氏の推定が正しいとすれば、氏自身も言われるように、ノートⅤ・178の「記述は1862年3月には書くことができたものである」⁴⁵⁾、と見るのが十分可能であるということになる。したがって、うえの事情それ自体は、ノートⅤ・178がノートⅧ・358よりもあとで執筆されたことの決定的な根拠にはなりえない⁴⁶⁾。

この問題を考える場合、なお次の諸事情を考慮にいれる必要があるように思われる。まず、ノートⅦ・303の記述について、①文中の「官庁報告書」は *MEGA*「異文」注では「工場法」となっている(*MEGA*, II, 3/2, *Apparat*・Teil 2, S. 28; 草稿集⑤178)。②「官庁報告書」の原文は、「Return」ではなくて「Report」となっている。〔ノートⅨでは、『工場 Return』と『工場監督官報告書 Reports』とがはっきり区別されている。〕③「異文」

42) 同上, 227ページ。

43)44)45) 同上, 222ページ。

46) 内田氏は、この問題について次のような批判・皮肉を表明されている。「ノートⅧ, S. 358に『工場』からの『詳細な記述』があり、ノートⅤ, S. 178にはその『要約』があることをもって、『詳述』→『要約』の執筆順序を必ずしも根拠づけられない。ちなみに吉田文和氏は、ポッペの『要約』（ノートⅤ, S. 192. cf. “im Lauf des 18ten Jhdt.”）→『詳細な引用』（ノートⅨ, S. 1166. cf. “Bis zur Mitte des 18. J. H.”）という順序で機械論草稿『連続』執筆説を根拠づけられている」（若手マルクス＝エンゲルス研究者の会, 1985年度例会, 当日配布の内田「大野論文へのコメント」）。

注によると、末尾の「(この結びを書き終える前に、報告書の字句を見ること。)」という部分があとから書き加えられたものである(草稿集⑤178)。これらのことから、ノートⅦ・303の本文執筆のときマルクスは「報告書 Return」の現物を見ていなかったと言えよう。また、MEGA編集部の「注解」では、また大野氏の推定でも、この「報告書 Report」とは『下院の奉答文に関する報告書、1861年4月24日付、1862年2月11日、下院の命により印刷 Return to an address of the Honourable The House of Commons, dated 24 April 1861. Ordered, by The House of Commons, to be printed, 11 February 1862.』のことであると断定されているが、はたしてそう言いきれんかどうか疑問の残るところである。次に、ノートⅧ・358の記述について、①冒頭の「報告書 Report」はMEGA「異文」注によると「国勢調査」から書き換えられたものである(MEGA, II, 3/2, Apparat・Teil 2, S. 44; 草稿集⑤307)。②「報告書」(予想される、あるいは、あとから入手された「国勢調査」の報告書のことかもしれない)の日付が「1861年または1862年」という曖昧な表現になっている。③「『下院の奉答文に関する報告書』、1861年4月24日付。(1862年2月11日印刷)」という部分は、あとから書き加えられた部分である(MEGA, II, 3/2, Apparat・Teil 2, S. 44; 草稿集⑤307)。これによって考えられることは、本文執筆時にはマルクスは『報告書 Return』を見ていなかったのではないかということである。上記の「報告書 Report」がこの『報告書 Return』のことであるとしても、少なくとも本文執筆時にはマルクスは正式の『報告書 Return』を手元に置いていなかったと考えなければならない。ともあれ、これらの諸事情を考慮に入れると、『工場』の再読→ノートⅧ・358の記述という大野氏の推定ははなはだ不確実・不正確なもののように思われるのである。なお一層厳密な検討を要するのではなかろうか。

次に、第4根拠について。大野氏は、「1862年3月ごろには、『I 資本の生産過程』の後半部の編成項目が次のように変化した」として、「3 相対的剰余価値 4 資本の蓄積 5 剰余価値にかんする諸学説」とい

う編成項目を提示され、これとノート V・178 の「資本と労働にかんする最終章」という文言とが矛盾すると言われる。しかし、ノート V・178 でいわゆる「1859年プラン」にもとづいて「資本と労働にかんする最終章」（プランでの正確な項目名は「5. 資本と賃労働」）を指示したマルクスが、それより 6 ページ先のノート V・184 でとりあえず「3 相対的剰余価値 4 絶対的剰余価値と相対的剰余価値との結合 5 剰余価値に関する諸学説〔6 本源的蓄積 7 資本と賃労働〕」（〔 〕部分はいわゆる「中間プラン」以後マルクスの言及がなくなるから）というプラン変更⁴⁷⁾を行なったか、あるいは、大野氏の言うように「3 相対的剰余価値 4 資本の蓄積 5 剰余価値に関する諸学説」というプラン変更を行なった（この場合には、まだノートⅧのプランのようなものが成立していないので、「資本と労働にかんする最終章」が存在するのかどうか、存在するとすればどこに位置づけられるのか不明。）と見れば、なんらそれは矛盾ではないであろう⁴⁸⁾。

大野氏は、ノート V・178 の「資本と労働にかんする最終章」という表現について、「ノート・Ⅷ, 1139 ページに書かれた『第 3 編 資本と利潤』のプランは、『12 結び、「資本と賃労働」』を最終項としているのであり、『資本と労働にかんする最終章』という表現は、これを前提とする以外になく、したがってこれ以後に書かれうるものである」⁴⁹⁾、と言われるが、しかし、ノートⅧのプラン作成以後マルクスは直ちにこのプランの編別構成に従

47) 内田氏はノート V・184 のプランについて本稿とほぼ同じような解釈をされている。すなわち、「3 相対的剰余価値……。4 絶対的剰余価値と相対的剰余価値との結合……。5 剰余価値に関する諸学説。6 資本の生成 / 資本蓄積と本源的蓄積 /。7 資本と賃労働……」（若手マルクス＝エンゲルス研究者の会，1985 年度例会コメント＝質問集，7 ページ）

48) 大村氏もほぼ同様の批判を加えられている。すなわち、「氏の疑問は、『b. 分業』の末尾が『学説史』の起筆以前に作成されたと理解した場合でも、①『中間プラン』が記入されているのが右の『最終章』に言及されている個所よりも更に 6 ページ進んだ 184 ページであり、②『中間プラン』を境に、マルクスが『1861—63 年草稿』起筆段階における『資本の生産過程』論の構想の『4) 本源的蓄積』、『5) 資本と賃労働』に言及することがなくなる、という 2 点を考慮すれば解消されよう」（大村・吉田共同論文，47 ページ）。

49) 大野論文①(上)，218 ページ。

って執筆していたとは思えない。というのは、たとえば、ノートXX・1255においてマルクスは次のように述べている。「絶対的な資本量が、個々の資本家の手中で増大し、それが社会的〔性格〕の規模を獲得するあいだに、他方では、諸資本の構成に一つの変化が生じる。不変資本にくらべて可変資本が相対的に減少し、……。〔このことは、資本主義的生産の特徴から諸結果を導き出す次の δ 〕において総括すべきではないか、それは問題だ。〕」(MEGA, 2045; 訳⁵⁰⁾, 237ページ)。文中の「次の δ)」とは、内容的に考えてノートXIIIのプランで言うところの「7 生産過程の結果」か、あるいはもしかすると「6 剰余価値の資本への再転化。……」のことであろう。しかし、マルクスはそのような指示文言を与えてはいない。「 δ)」という記号・番号は、筆者が推測するに、目下マルクスが執筆中の「 γ) 機械。等々」の「次の δ)」ということではなかろうか。あるいは、この「 δ)」という記号・番号は、 $\alpha \rightarrow \beta \rightarrow \gamma$ の次の番号「4)」を意味し「4) 資本の蓄積」を指しているのかもしれない⁵¹⁾。しかし、いずれにしても、マルクスは、ノートXIIIのプランに正確に従った指示文言を与えていないと言わざるを得ない。また、ノートXXおよびノートXXの〔表紙第二面〕の「3) 相対的剰余価値」「 γ) 機械。等々」というタイトル、ノートXIIIの〔表紙第二面〕の「4) α) 剰余価値の資本への再転化。……」、ノートXIII本文の「4) 剰余価値の資本への再転化」等々という

50) マルクス著／中峯照悦・伊藤龍太郎訳『1861-63年草稿抄 機械についての断章』、大月書店、1980年。以下においても、この訳書からの引用にさいしては、引用箇所を、訳x x xページと略記して示す。

51) 内田弘氏は、この「次の δ)」について次のように解釈されている。「ここでいう『もっとあとの〔節〕 δ 』とは、『1863年プラン』で考えると、 α =商品・貨幣論、 β =転化論、 γ =剰余価値論、 δ =蓄積論となる。すなわち、マルクスは機械論草稿の『後半』……では『1863年プラン』における『7. 生産過程の結果』に従って、『商品の価格。プルドン』を位置づけているのである」(内田論文④, 91ページ)。筆者の場合は、4番目の文字ということで「 δ)」=「4)」と解し、さらにこの「4)」を、内容を考慮して強いて理解しようと思えば「4) 資本の蓄積」のことであろうと理解する。しかし、内田氏のように「 δ)」とは『1863年プラン』で考えると、 α =商品・貨幣論、 β =転化論、 γ =剰余価値論、 δ =蓄積論となる」とまで言われると、そのようなプランが『1863年プラン』の何処にあるのかと問いたくなる。解釈の意図は解るが、強引にすぎるのではなかろうか。あくまでも一つの可能な解釈にすぎないものと理解しておくべきであろう。

表現（*MEGA*, 2214）は、すべてノートⅧのプラン以降に執筆されたものであるにもかかわらず、このプラン項目名・項目番号にかならずしも従ってはいないと言わざるをえないものである。とすれば、たとえばノートⅤ・176—211がノートⅧのプランのあとに書かれたものであるとしても、「ノートⅤ・178の『資本と労働にかんする最終章』という表現は、これ〔ノートⅧのプラン——松尾〕を前提とする以外になく……」⁵²⁾ という大野氏の主張には根拠がないと言わざるをえない。

また、大野氏は、1862年3月以降「3 相対的剰余価値 4 資本の蓄積 5 剰余価値に関する諸学説」という編別構成プランが存在していた根拠として、「ノート・Ⅱの末尾にみられる『Ⅰ, 4, 本源的蓄積』はノート・Ⅲで姿を消し、かわって、『資本の蓄積』を意味する『蓄積のところで』（ノート・Ⅲ, 104ページ）、『蓄積の項』（ノート・Ⅳ, 168ページ）、『蓄積に属する』（同ノート, 171ページ）という表現が散見される」⁵³⁾ ということ、「『5 賃労働と資本』項もたぶんこれをさすであろう『第5章』（ノート・Ⅲ, 103ページ）の表示を最後に、もはやみいだせない」⁵⁴⁾ ということを指摘されるが、しかし、そうであるとすれば、どうしてそれ以後「4 資本の蓄積」という表現が、「剰余価値に関する諸学説」については番号「5」が付けられているにもかかわらず、登場しないのか、不明と言わざるをえない。たとえば、ノートⅨ・379では「これは蓄積の篇に属する」（*MEGA*, 553; ⑤359）、ノートⅩ・478では「このことは資本の蓄積に関する篇 Abschnittでも説明することにしよう」（*MEGA*, 737; ⑥104）という表現が見られるが、番号「4」が付けられていないのである。したがって、1862年3月当時、マルクスが「3 相対的剰余価値」と「5 剰余価値に関する諸学説」の間に「4 資本の蓄積」をはっきりと位置づけていたと言えるかどうか、甚だ疑問である。

また、大野氏は、1862年3月ごろには、『Ⅰ 資本の生産過程』の後半部

52) 大野論文①(上), 218ページ。

53)54) 大野論文①(下), 209ページ。

の編成項目が「…… 4 資本の蓄積 5 剰余価値に関する諸学説」というプランに変更された根拠として次のように言われる。「ノート・XIV, 850a ページでの『資本の把握でのウェイクフィールドの独自の功績は、「剰余価値の資本への転化」にかんする以前の項であきらかにされている』というマルクスの明言がこの項を執筆していたことの論拠にはならない……。……これらの明言は、これらがおこなわれている『5 諸学説』の位置から、先行している諸項目を予示したものとまず理解しなければならない。したがって、『5 諸学説』以前に、項目編成としても、『協業、分業、機械』および『剰余価値の資本への転化』（＝資本の蓄積）が予定されていたのである」⁵⁵⁾。ここでの記述を、「諸学説」に先行する項目編成として「協業、分業、機械」および「剰余価値の資本への転化」の存在を提示したものであるという大野氏の理解それ自身は正当なものであるとしても、このような項目編成が、ノートXIV・850aの執筆時期（1862年10月）よりずっと先の1862年3月ごろから明確に存在していたということにはかならずしもならない。むしろ、ノートXIV・850aのプランは、ノートVIIIのプランを先取りして示したものであると理解すべきであろう。というのは、このころになると、ノートVIIIのプランを先取りしたような指示文言が幾つか現われるからである。たとえば、ノートXIV・853には「プライスの幻想には収入とその諸源泉とに関する篇 Abschnitt のなかで立ち返ること」（MEGA, 1372; ⑦291）——これに比して、ノートXVI・977では「剰余価値と利潤との混同または両者の区別の欠如は、ただ正当な叙述それだけが問題であるかぎりでは、経済学における最大のばかげた誤りの源〔であった〕。……だが、このような批判は、この章の最終部分 Abschnitt に属する」（MEGA 1606; ⑧101）と言われている。また、ノートXV・935では「プルドンとバスティアとの利子に関する論争は、俗流経済学者たちが経済学の諸範疇を擁護するやり方としても、浅薄な社会主義……がそれを攻撃するやりかたとしても、特徴的である。われわれは俗流経済学者に関する篇のなかでこの点に立ち返る」（MEGA, 1522; ⑦515）。

55) 大野論文②(上), 213-214ページ。

ノートⅧ・1086では「俗流経済学者たちに関する章のなかで言及すること」（*MEGA*, 1776; ⑧386）。ノートⅧ・1089では「われわれはこれらの例外を、われわれの本文のなかでは、価値の生産価格への転化について述べる箇所で取り上げなければならない」（*MEGA*, 1728; ⑧397）。ノートⅧ・1098では「蓄積，すなわち剰余価値の資本への転化の最初の叙述にさいしてすぐに言えることは……」（*MEGA*, 1796; ⑧425）。ノートⅧ・1109（*MEGA*, 1816-1817; ⑧460）やノートⅧ・1136（*MEGA*, 1855; ⑧532）の記述，等々。あるいは，ノートⅧのプランの「12，結び。『資本と賃労働』」を想起させるノートⅧ・777の「この点は，『資本と賃労働との関係の弁護論的叙述に関する篇 Abschnitt で説くことにしよう」（*MEGA* 1251; ⑦81）という記述がある。したがって，大野氏の言う1862年3月ごろのプラン（とりわけ「4 資本の蓄積」）がたとえ存在していたとしても，ノートⅧ・850aの叙述はその存在の根拠にはかならずしもならない。

最後に，第5根拠について。大野氏は，ノートⅤ・176以後の分業論はノートⅦ・299～ノートⅨ・379における「生産的労働と不生産的労働との区別」論に立脚した社会的分業論であり，したがってノートⅤ・182—183はノートⅦ・299～ノートⅨ・379よりあとに執筆されたと推定され，この推定をもって，ノートⅤ・182—183が「『5 諸学説』よりもあとに，あるいはこれと並行して執筆されたこと」をしめすとされる。

しかし，ノートⅤ・182—183部分は，少なくとも，1862年夏以前に執筆されたものと思われる。というのは，こうである。ノートⅤ・182に次のようなあとから書き加えられた部分がある。「これによって，概説書原稿がその著者自身に与えてくれる——と証人能力ある証人たるロッシャー教授の「言う」（　　を見よ）ような——，私的な楽しみは別としても，国民的富の増加が生じる」（*MEGA*, 280; ④496-497）。*MEGA* 注解には次のようにある。「この文の追加を行なったさいにマルクスは正確な出典指示のために場所を空けておいた。これはおそらく，『国民経済学原理』（ヴィルヘルム・ロッシャー『国民経済学体系』，第1巻），増補改訂第3版，第1巻，シュト

ウッガルトおよびアウクスブルク、1858年、のことであろう。……1862年の夏、マルクスは、フェルディナント・ラサールから借りたこのロッシャーの書物を、ノート第7冊、ロンドン、1859—1862年の223—233ページに抜粋したのであった。この追加部分が書かれたのは、たぶんこの抜粋以降のことであろう」(MEGA, II, 3/1, Apparat, 144; ④498-499)。これによると、この追加部分の書き加えは、1862年の夏(=ロッシャーの書物からの抜粋)以降であるとされている。しかし、「マルクスは正確な出典指示のために場所を空けておいた」、つまり正確な出典指示ができない状態であったということから考えると、書き加えは、1862年の夏(=ロッシャーの書物の抜粋)以前に行なわれたものと推定すべきではなかろうか。MEGA 注解が言うように追加部分の書き加えがたとえ1862年夏以降であるとしても、もとのノートV・182—183の執筆は(ロッシャーの書物の参照指示が書き加えた以前の本文に存在しないことから考えて)1862年夏までに行なわれたことは確実である。したがって、われわれの推定に従えば、追加部分の書き加えが1862年夏以前であり、ノートV・182—183の執筆はさらにもっと早い時期——「諸学説」以前、遅くともロッシャーの書物のやや正確な出典指示[『国民経済学の基礎』, 第3版, 1858年]があるノートXI・499(1862年7月ごろと推定)以前あるいはロッシャーの書物が登場する1862年6月16日付のマルクスのラサール宛の手紙以前——に行なわれたものと考えられる。したがって、ノートV・182—183は、「諸学説」以後に執筆されたものではなく、おそらく「諸学説」以前に、あるいは遅くとも「諸学説」前半期に執筆されたものであると見てほぼ間違いないと言えよう。したがって、この第5根拠は、「ノート・V, 176ページの……一本の線以後の記述が『5 諸学説』以後に書かれた状況をうかびあがらせる」ものではけっしてなく、むしろその逆の状況さうかびあがらせるものであると言うべきであろう。

以上、われわれは、大野説の5つの根拠のうち、第2—5根拠を検討した。その結果、それらはけっして機械論草稿連続執筆説の根拠をなしてはいないということがわかった。残るは、第1根拠である。これについては、1985年

秋以降、大村・吉田両氏によって、論争の「新たな展開」=「『b. 分業』項末尾の執筆時期」問題として検討・批判されている。次に、大村・吉田両氏の大野批判を検討することにしよう。（つづく）

（まつお・じゅん／経済学部助教授／1988. 3. 10受理）

（追記） 本稿(下)脱稿直後（1988. 4. 6），大野節夫「ノート・V（1861-63年草稿）の執筆過程」『経済学論叢』（同志社大学）第39巻第3号，1988年3月10日発行を入手した。そこでは，大野説に含まれている多くの「あやまりとあいまいさが……再検討され，払拭され」（28ページ）ている。この「訂正」大野説については，別の機会に稿を改めて検討することになるであろう。（1988. 4. 11）